

#### IV. 本質直観

本質直観は、フッサールの発見した哲学的寄与の中でもっとも重要なものである。本質直観は、抽象の理論 (Abstraktion) の中で熟成されてきた。抽象化の理論は、フッサールでは、二種が考えられる。

抽象化は、一般化 (Verallgemeinerung) である。この抽象化もしくは一般化に二種が考えられる。形式的な一般化と質料的な一般化とである。形式的な一般化は、簡略化されて、Formalisierung (形式化) と呼ばれ、質料的な一般化は Generalisierung (類的普遍化) と呼ばれる。形式的な一般化は物象化 (Versachlichung) に対立し、類的普遍化 Generalisierung は Spezialisierung (特殊化) に対立する。物象化は質料化と呼ぶことができよう。

ここで訳語を決めておく。Verallgemeinerung を一般化と訳す。Formalisierung を形式化と訳す。Generalisierung を「類的普遍化」と訳す。普遍化と一般化とはだから区別される。一般化には、形式的なもの、質料的なものがあり、質料的な一般化を類的普遍化と呼ぶ。

(A) 形式的な一般化は数学的解析のうちで、機能する。つまりこれは数学的抽象化といってもよい。フッサールの挙げる例は次の如し。空間からユークリッド多様体への移行は、形式的な一般化である。これは質料的な一般化ではない。Formalisierung を、『イデー I』の付論 (Beilage) 1 では、論理的—数学的—一般化と呼ぶことから分かるように、形式化は特に数学的な形式化である。形式化とは、要するに、事象を含むもの Sachhaltiges を、純粹論理的—形式的なものへと一般化することなのである。これを逆の方向からみると、論理的形式的なものの事象化になる。たとえば、リンゴ 3 ケ、ミカン 4 ケをそれぞれ 3, 4 と把握するのも、また  $a \times b = b \times a$  を理解するのも形式的な一般化である。重要なことに、この形式化は形式化する抽象であって、形相的還元ではない、ということである。この抽象化は、究極的には、「ある物一般」 (Etwas überhaupt) という最高の形式論的—存在論的カテゴリー—対象一般の特殊化に至る。このあるもの一般は、空虚な核としての未規定の何ものか、質料一般に向かい、究極的には、対象一般に終局する。

(B) これに対して、類的普遍化 (Generalisierung) の方は、質料的な一般化 materielle Verallgemeinerung と呼ばれる。それは形相的—一般化であり形相的還元の反復によって獲得される。類的普遍化の方は、究極的には、最高の事

象を保持している本質に至る。質料的一般化の質料性は事象を保持することであり、領域性を維持しながらこの一般化はなされる。

質料的本質は最高のレベルでは類であり、類の下に位置するのが、類的普遍化された本質である。この質料的一般化は、純粋な本質の場合は「純粋な類的普遍化」(reine Generalisierung) と呼ばれる。純粋な本質においては、種 (Art) から類(Gattung)に上昇していく。類とは、それ自身質料的であるような類であり、そのような類を目標として、類的普遍化はすすめられる。質料的な最高の類を Region (領域) と呼ぶ。これまでのべてきたことは、本質直観の実際の機能についてであり、この本質直観が実は、存在論 (形式的存在論と領域的な質料的存在論) の関係を明らかにするものであった。

フッサールは結局のところ二種の直観を認めている。一つは、形式本質(Formwesen)を帰結する直観であり、他方は、質料的な本質 Wesen に導かれる直観である (Hus.III.384)。但し、フッサールの考えでは、たとえ質料的なものについてであれ、純粋な陳述の《Aussage》命題は、すべて形式的命題であり、これは形式的存在論に含まれる。

このようにして、二つの直観は、二つの種類の一般化 (もしくは抽象化) に関連づけられる。形式化とは数学的形式化を模範例とする抽象化であり、形式化もしくは、形式的な一般化である。これに対して、他方の類的普遍化は、イデア (Idee) を見る抽象化(ideierende Abstraktion)である。

このような考えは、『イデー I』の冒頭と付論 (BeilageI) に論究されている。しかし、さらに根本的には、『論研』(II/2,VI.L.U.) で扱われていた。つまりそこでは、カテゴリー的一般的なものは、2つの根本的に異なったグループに分けられており、そのひとつは、総合的—形式的な一般的なものであり、第二のものは理念化によって与えられる形相的な一般的なものである。この第一のものが『イデー I』では、形式化数学的—形式化的抽象と呼ばれた。第二のものは、類的普遍化もしくは形相化的抽象 (イデア視的抽象) と呼ばれることになった。前者は、形式的存在論に、後者は領域的存在論にその可能性を与える。

フッサールにとってとくに重要であったのは第2の「イデア視的抽象」である。イデア化によって主題化するのとは、個々の物から、その物の固有のイデアを視ることによって、それ以外の非イデア的なもの、つまりは偶然的で非本質的なものを排除すること、さしあたっては、非主題化することであった。ロマ

ン・ヤコブソンやホーレンシュタインは構造言語学の音韻論における音韻素の同定にもこの方法が使われているという。この思想は、イデアチオン、本質直観として展開された。イデアチオン、本質直観は、初期ではイデア化する抽象として簡単に考えていたが、後期になって、その基礎理論を、自由変更理論として整備した。

フッサールの抽象化の理論は主題化—非主題化への関連づけによって地平性の概念の内に吸収できるものである。つまり、イデア化する抽象においては、次のようになる。たとえば眼前にある机を見て、その机のイデア化する抽象を行うときには、机のイデア（本質形相）を主題化するが、まさにこの主題化によって、机のイデア以外の、机の現れに伴ってくる共に現れるものを捨象してしまうことになる。このような抽象化の理論は、『危機書』において再度確認されている。

さて、ここで、再び理念化、本質直観についての、晩年のフッサールの洗練化の紹介を試みることにしよう。この洗練化をフッサールは、自由変更理論と呼び、『経験と判断』（Landgrebe 編）においても、1925 年の講義『現象学的心理学』においても扱っている。

ここで『経験と判断』という著作の特殊な性格に目を転じてみると、『経験と判断』はラントグレーベの手になったものであり、思想はフッサールに由来しても、文体はラントグレーベの彫琢を経たものとみなされており、その意味では『現象学的心理学』講義の言葉をフッサールの最後の言葉と考えるべきであろう。とはいえ『経験と判断』のテキストがまったくあてにならないという訳ではない。驚くべきことに、この2つのテキストは、思想内容としては、『経験と判断』の方が豊富で包括的であるが、しかも部分的には文章が酷似しているところか、同一の文もみられる位だからである。おそらくラントグレーベもその序文に書いているし、またシュトレカーも認めていることだが、『経験と判断』はフッサールの未刊の諸講義のテキストを使用しているのでこのように酷似しているのであろう。また『経験と判断』もまったくフッサールから独立の書物という訳ではなく Landgrebe も序説に書いているように、この書物はフッサールとその私的助手との協同—共同作業の成果なのである。

『経験と判断』の性格については以上にのべた通りである。しかし、この書物では、非常にまとまった形で、本質直観、イデアチオンの基礎理論としての自由変更理論がコンパクトに且つ豊かな包括性をもって（例えば、類と類との

間の自由変更理論など) 展開されている。

ここでは、しかし、『現象学的心理学』(Hua.IX)のテキストを拠り所としてのべることにはしよう。

自由変更理論は純粋な想像(reine Phantasie)による。実在的な変化と想像力による変更とをフッサールは厳格に区別している。事実の連関の中に、ある事例をみいだし、それを模範像 (Vorbild) として、体系的に様々の後続する像 (Nachbilder) を追形成 (Nachgestalten) する。この原像を後続する像 (Nachbilder) の系列に向けて追形成することによって、原像の想像力による後継像の系列がえられる。原像の具体的でかつよく似た形態形式の全体がえられる。これは、類似性を根拠づける本質の統一性である。

追形成された像系列の多様性を仔細にみてみよう。そこには、原像に似た類似像が並んでいる。しかしこれらの類似像が並列し、並んでいるとき、これらの複数の像をして類似像たらしめているものがみられる。それらの複数の像の系列が、まさにあるものに関わっているが故に類似していると見て取ることのできるものがある。そもそもこれらの複数の像の類似性は、同じ一つの原像から出発して、類似性をもとに導き出されたものであるから。

この《あるもの》、つまりこれらの複数の類似像がそれに関わっているが故に似ているといえるもの、このものを、フッサールは、一つの統一性ととらえる。この統一性が様々の追形成された像の系列を潜り抜け通り抜けているが故に、これらの像系列は相互に類似しているとみられる。自由変更のこの像の系列を潜り抜けているもの、それらの自由変更のうちで「保持されているもの」これこそが不変更なもの、「必然的に一般的な形式」、「本質形式」である。ある一つの恣意的に選ばれた係を原像として、それとの類似性をもとにして、自由変更系列が、原像の追形成として導き出され、その追形成の過程において「不変更なもの」「必然的に一般的な形式」「本質形式」が保持される。

いま私は、原像が恣意的に選ばれたとのべたが、まさにこの原像の恣意的選択のうちに、自由変更系列の開放性がある。どのように自由変更系列を展開するかは原像として何を選ぶかによって変わるからだ。

フッサールがここで類似性を「根拠づける本質」とのべているのは重要である。なぜなら類似性を予め認知し、その類似性にもとづいて自由変更が遂行さ

れているのであれば、自由変更を背後で動かしている内的動力は受動的綜合であるということになるから。この受動的綜合については、後にのべるつもりである。

自由変更の実際の遂行を仔細にみても、変更を遂行しながら、変更体を次々と産み出すことができるのは、想像力による。だからこれを自由想像とか想像変更ともフッサールは呼んでいる。このとき、自由変更系列の原像と新しい係との関係を考察してみよう。変更体 (V0) から→変更体 (V1) の関係は、V1がV0との類似性を保持しながらしかも異なるということである。このことを、フッサールは変更体 (Variant) の各々は好きなように (beliebig) という体験様態において登場するという。また変更の過程も「恣いままに」 (beliebig) という性格をもって現れる。しかもここで、変更の変更する項0→1への移行のなかで一つの不変更のものが通り抜けている。この不変更性はそれ自身不変更的である。この不変更性の登場は、必然的である。

恣意的で開放的な変更の遂行の中で、一方では、我々にとってどちらでもよいもの、無関心なものがあり、他方で、哲学者にとって関心事となるものがあり、両者が分かれて行く。前者の我々にとって無関心なものとは、変更系列の変更体の相互に差異化する相である。これはいわば、ニュアンスであり、差異相である。フッサールは元来絶対的に区別され固定される本質をめざしており、「《流れ》の規定できないものの属する究極のニュアンスは排除したままにする。」(『厳密学としての哲学』S.W.S40.Logos I.S.315) と考えていた。他方で我々が関心を抱くもの、つまり、後者は、変更体を通じて重なり合ってくるもの、覆い合うものである。この覆合の中でつねに不変更でありつづけるもの、不変更のありかたを保持するものである。即ちこれは、一般的な本質である。この一般的な本質をフッサールはプラトン以来のギリシャのイデア論—存在論のテルミヌス・テクニクスを受けついでイデアと呼びエイドスと呼ぶ。

「イデアを視る抽象」という方法概念の基本的意味はこのようにして明らかになってきた。つまり、イデアを視る、本質を見るということをめざした抽象化の作用であり、イデア=本質を見ることを主題化するために捨象されるのは、ヴァリアチオンのニュアンスであり差異相なのである。

フッサールのこの方法は、彼の学位論文 (哲学博士) である『変分法への寄与』(佐藤愛子訳あり：『数学文化』) 以来の経緯をもつもので、おそらくフッサールは己の哲学の方法としては、終生その洗練化に努めたものである。この本

質直観の方法を、フッサールは数学の形式化の考えをもとにして、発想したのにちがいない。もとより方法の発想が数学的なものに根差していたにせよ、それでも、この発想を当時のヨーロッパの哲学的状況においてみれば、その独自の位置が理解されるであろう。

当時はヘーゲルの、ヨーロッパ最後の思弁的哲学体系が解体し、このことがヨーロッパの哲学を一種の混乱の中におとし入れていた。唯物論、実証主義、歴史的相対主義の中にあって、ただフッサールと初期の現象学運動が、「本質直観」を哲学の方法として、新しく哲学を確かな方法のレールの上のせることができた。だからこそハイデッガーのような人は、この本質直観の方法を、フッサールの哲学に対するほとんど唯一の貢献であるとまで極論したのである。ほとんど同じことは、ヤン・パトチカものべている。ヤン・パトチカは、ほぼ次のようなことをのべていた。それはプラハ哲学サークルで 1938 年 5 月 13 日に行われたフッサールの死去の直後の追悼講演においてである。フッサールのなした古よりの「アプリアリ」の再発見こそが、つまり「本質直観」こそが、当時の実証主義や相対主義の風潮に対抗する理論的支柱を与えたのである。プラハを中心とする東ヨーロッパの構造主義もその例外ではない。実際に、たとえば、音韻素(Phonem)の同定の際にも、様々な母音 | a | の現れから、母音 | a | を同定しうるのは、この本質直観による。

#### 補論 1

##### 本質直観（自由変更）について

本質直観というよりも、私の見るところでは、自由変更理論や形相的還元という概念の方がよい。いっばんには直観というと感性的直観を指すと思われるからだ。これは感性的直観ではまったくない。直観といっても、方法的操作性を含むので、つまり過程性を含むので、理解といってもよいものと思われる。いづれにせよ、「多様な変更を歩み抜く同一性」という見方は、フッサールの基本的発想の 1 つである。この同一性は空虚なのではなく、たとえば、構造言語学の音素の概念をもよく根拠づけるものであるのは、ヤコブソンの場合をみてもいえよう。音素は多くの変異体をもつが、1 つの音素としては同定されると考えられている。たとえば 3 つの種類のあるドイツ語の | r | を例にとる。それぞれの | r | のその知覚聴覚の内容は聴覚的にみると異なるにもかかわらず、人は

ドイツ語の |r| 音素としては同定することができる。

- ①舞台のドイツ語の |r| (巻き舌)
- ②日常語の |r| (のどひこを振るわせる)
- ③-er (たとえば Rheinländer, Japaner の語尾の |r|)。

これらのエルはかなり異なって響くけれども同じ音素とし同定される。この同定が可能なのは、変異体を通して同じ一つの音素を見ているからである。これは、本質直観の一つの機能であり、響き現れている個々の音が問われているのではなく、それらを通して同じ音素を見ているから。

知覚と本質直観との関係はメルロー・ポンティによって巧みに指摘されている。

『眼と精神』(邦訳みすず書房 p.49) 本質直観は知覚の上に成立する。知覚を支えにし、知覚に基底づけられている。本質とは、その意味でこの世界の外にその外部に何かを求めることではなく、いちど経験的知覚の中にみたものを取りあげなおし、その意味を解明することである。本質と個々のものとの間に二重の包摂関係を、メルロー・ポンティは認めている。

## 付論2 抽象化の問題

全体性からその一部を浮き彫ることが抽象化である。それは、主題以外のものを排除する排外性と一面性のことである。この抽象化について『危機書』のうちで扱われている。(S.230, 232, 238) 科学のおこなうこの抽象化の方法は生活世界への離反にほかならないとみることができる。生活世界は全体性であり、それを抽象化し一面化するところに、生活世界からの離反としての科学的世界が打ち立てられる。あるいは、特殊世界 (Sonderwelt) としての科学の世界が成立する。科学的な世界、特殊世界も (Sonderwelt) も、ともに1つの唯一の生活世界における、特殊のあり方であり抽象的一面化である。その特殊世界の特殊性つまり「特殊化」を成立させるのは実際的な「関心」である。関心はある目的に、実践的目的に向けられている。もし生活世界を清浄な水の供給という関心からのみ主題化すると水利システムとしての特殊世界が成立する。

これは、他方でクラウス・ヘルトの「洞察 (phronesis, Einsicht)」と「見解

もしくは私見 (doxa, Ansicht)」との関係にも関わる。洞察 (Einsicht) は全体性を視る。それに対して「見解 (Ansicht)」は私見にのみ、私の利害にのみ関わる。更にこれは、構造論の対立性 (相互排他的、排外的、一面性) と中和化 (全体性の回復) の問題とも関わる。更にこれは、政治的状況の全体性への洞察の意志と自己意志 (我意) との問題に関わる。いかに自己の我意を否定して政治的状況の全体性に調和させるか、という問題である。

科学の方法が抽象化であるということのうちに、生活世界の主題化が、科学に拒まれているとという根拠がある。科学生活世界の全体を主題化できない。だから抽象化とは生活世界を非主題として、世界を狭く物自体として主題化することにある。科学の方法は抽象化と一面化である。それは、Thema 化である。形式化するテーマ化である。

この生活世界を一面化し、他の面を排除するという仕方での主題化が抽象化に他ならない。フッサールのうちには、首尾一貫して主題化と非主題化の区別が機能しており、まさしく操作的な概念になっている。主題化と非主題化の区別はまさしく核としての現われと地平性という区別にほかならない。

科学の方法の抽象化を更に掘り下げることによって『危機』書の新しい読みが可能になるだろう。更に重要なことは、生活世界が更に超越論的哲学の手引きにされているということであろう。つまり、超越論的な哲学のための指標 (インデックス) であって、そこから手引きとしての生活世界の他の機能が生じる。だから、生活世界は一方では、一切のすべての特殊世界の地盤である。他方では、他のすべての特殊世界を導く糸である。つまり、科学の世界などを導く糸である。このようにみると超越論的な哲学も科学と同じような生活世界の1つの可能性であるとみるべきなのか。つまり生活世界の1つの可能性なのか。